

一〇一三年度 光塩女子学院中等科【第三回】

## 国語入試問題

一〇一三年二月四日（土）実施

### 《注意事項》

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題用紙の中を見てはいけません。
- ② 解答用紙に受験番号（漢数字・算用数字どちらでも可）と氏名を書きなさい。
- ③ 解答は、解答用紙に書きなさい。
- ④ 記述問題の字数については、すべて句読点をふくみます。

【一】【A】・【B】は同一の著者の文章です。これを読んで、後の問い合わせに答えなさい。

【A】百姓は、自然（生きもの）には毎日目を向けていますが、それでおしまいです。「自然とは何か」などと問い合わせようとは思いません。なぜなら、自然を見つめている自分を、さらに外側から眺めるもう一人の自分がいないと無理だからです。

これは科学的な方法によく似ています。科学は自然を突き放して対象として、外側から分析するからです。したがって、科学は客観的で普遍的な部分の、誰もが納得できる説明には向いていますが、私たちの個人的な経験や情愛を切り捨ててしまします。たとえば「いついうこと」です。ある学者が、「私が草刈りをしている様子をしばらく見ていて、私に声をかけてきました。」「百姓仕事は単純作業の連続ですね。大変でしょう」と。私は驚いて、あっけにとられました。外側から見ればそう見えるのかもしれません。しかし、私は草の名前を呼びながら、草と会話しながら、楽しいひとときを過ごしてましたのです。

外からのまなざしはすぐに言葉にできます。ところが内からのまなざしは、人に語ることはあまりありません。私たちは物事を外から客観的に見るよりも、内からのまなざしで見たり感じたりする方が多いものです。とくに百姓仕事はそうです。

【B】村に住んでいると、ある日突然に、蛙の鳴き声が村中に響き渡ります。六月上旬の夜のことです。百姓でない人は「夏が来たな」と感じるでしょう（私は「誰か田植えを始めたな」と思います）。蛙のほとんどは田んぼで産卵します。鳴いているのは雄の蛙で、求愛の声なのです。蛙は田んぼが産卵できる状態になるまで鳴かずに待っています（代掻き・田植えが終わると、田んぼの水は温まり、干上がる）ことがなくなり、餌の藻類が一斉に発生し、卵からお玉杓子が生まれ育つための条件が整うからです）。

【X】私たちは「代掻きと田植えが引き金になつて、蛙が鳴き始めたんだな」と因果関係を意識することはなく、蛙が鳴き始めるのは毎年くり返される「自然な現象」であつて、「よいよ本格的な夏が来た」と蛙の鳴く声という自然に【Y】を感じるのです。

赤とんぼが急に飛び始めるのは、田植えをして四五日過ぎた頃です。日本で生まれる赤とんぼのほとんどは田んぼで生まれます。しかし、赤とんぼが（あ）ふれ飛ぶ夏空や秋空は「自然な現象」であつて、この赤とんぼはどこで生まれたのだろうか、と考える

「」はありません。まして、田植えをして四五日過ぎたから、そろそろ赤んぼが飛び始める頃だ、などと待ちかまえる」ともありません。近年、東日本では赤んぼ（秋茜）が（い）グキゲンしています。「少なくなった」と気づく人もいますが、「なぜ少なくなったのだろうか」と考える人は、百姓にもあまりいません。

①どうも身近な自然というのは、ことさらに意識して、移ろいの原因を突きとめようとするようなものではありません。自然にあるがままいいのです。

夏の畑での百姓仕事は暑くて困ります。ところが田んぼでの仕事は涼しいのです。とくに稻の葉を揺らして「ちらりと吹いてくる風に包まれると、ほんとうに身体の中を風が吹き抜けて行くような気がして、気持ちがいいものです。これは百姓なら実感として誰でも感じています。でも、なぜ田んぼの風は涼しいのか、と問う」とはありません。「田んぼには水が溜まっているからじやないの」とは思うでしょうが、「ではなぜ水が溜まっていると涼しいのか」と問われると、「冷たい水のイメージがするから、涼しい感じがする」と答える人が多いのですが、夏の田んぼは稻が繁つていて、水は見えません。

田んぼと畑の気温を調査した研究によると、その差は（う）ハイキンすると2・5℃くらいだったそうです。「へえー、そんなに違うのか」とは思いますが、「なぜそんなにまで差が出るのか」と考えることはありません。

晴れた日の夏の夕暮れともなると、田んぼの稻のすべての葉先に、水滴が現れます。それが夕日に反射してきらきら輝いている風景は②まるで星空眺めているのかと錯覚するぐらいで、見とれてしまします。しかし、昼間はさらに多量の水分が葉先から蒸散しますが、すぐに空気中に消えていくので、人間の目には見えません。夕方になると空気が水分を抱え込むことができなくなり、水滴として葉先に留まってしまうから見えるのです。

X 私たち百姓も「そうか、この水滴が昼間は蒸発して、風を冷やしているのか」などとは考えません。③こうした科学的な説明は、涼しい風に身をまかせている気持ちや稻の葉先の露を星空に見立てている感性を台なしにしてしまいます。無粋な、出過ぎた、無駄な説明だ、と感じるのでです。

」のように私たちは四季折々の様々な自然に目をとめ、それを「自然な現象」として、満喫しています。生きものに目を向けることは気持ちのいいものです。しかし、その出現の原因を問い合わせたりはしません。④そんな意識が持ち上がりしたら、自然は楽しむことができません。自然は、自然なままに感じて身を任せて、離れるとすぐに忘れていくものです。それがいいのではないでしようか。

(宇根豊「日本人にとって自然とはなにか」による)

※注

普遍的…広く一般にいきわたるさま。

まなざし…ものを見るときの目のように。また目を向ける方向。

代焼き…田植え前に田に水を入れ、土を細かくしてかきなすい」と。引き金…きづかけ。

蒸散…植物の体内の水分が体表から水蒸気として放出される」と。台なし…物事がだめになること。

無粹…物の風流な味わいがわからないこと。

満喫…心ゆくまで楽しむこと。

問一 次の各設問に答えなさい。

(1) \_\_\_\_\_ (あ) う (う) のカタカナを漢字に直しなさい。

(あ) ムレ (い) ゲキゲン (う) ヘイキン

(2) 本文中の **X** に共通してあてはまる語として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア そして イ ところ ウ あるいは エ しかし

(3) 「意識」に否定の意味を加えると、「無意識」という熟語になります。」のように上に否定の意味を表す漢字がつく三字の熟語は他にもあります。次の①～③の各熟語には「無」「不」「非」のどれをつけるのが適当ですか。それぞれの熟語につく否定の漢字を答えなさい。

①  常識 ②  公平 ③  閑心

問二 本文中の **Y** にあてはまる二字の熟語として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 季節 イ 愛情 ウ 興味 エ 時間

問三 ① 「どうも身近な自然というのは、ここぞに意識して、移ろいの原因を突き止めようとするようなものではありません」とありますが、「移ろいの原因」とその結果として挙げられている具体例をこの文より前の部分から二十五字以内で探し、初めと終わりの五字を書きなさい。

問四 ② 「まるで星空を眺めているのかと錯覚するぐらい」という表現は比喩表現ですが、筆者は何のどのような様子を「星空」にたとえていますか。わかりやすく説明しなさい。

問五 —— ③「こうした科学的な説明」とあります。が、次の1～4の中で筆者の述べる「科学的な」ものの見方をしていよいものを見出せ。記号で答えなさい。

- 1 太陽の方角を向いて咲くひまわりは、夏の花というのにふさわしい。
- 2 打ち水をすると涼しくなるのは、水が蒸発して地表の温度を下げるからだ。
- 3 降り積もった雪は、光を反射してまつ白なふどんのように見える。
- 4 地球に降り注ぐ光の強さが強い一等星は、肉眼でも明るく見える。

問六 —— ④「そんな意識が持ち上がつたりしたら、自然は楽しむことができません」とあります。が、筆者は自然を楽しむにはどうのようなことが大切だと述べていますか。次の文章の空欄を、後の条件に従つてうめなさい。

- ・科学のように自然を対象物として（1）的に分析したり、自然現象が現れる原因を考えたりするのではなく、（2）大事にして、自然を内からのまなざしで（3）に感じる」とが大切だと述べている。

条件 ① ( ) には、【A】文中の漢字一字を抜き出して答えなさい。

- ・( ) には、【A】文中から十字以内の言葉を抜き出して答えなさい。
- ・( ) には、【B】文中の五字の言葉を抜き出して答えなさい。

問七 —— 「私たちは四季折々の様々な自然に目をとめ、それを『自然な現象』として、満喫しています」について、次の各設問に答えなさい。

- (1)筆者は、具体的にどのように自然に目をとめ、自然を満喫してきましたか。【A】の文章を読んで一行以内で書きなさい。  
(2)あなた自身が、四季に目をとめ、自然を満喫した体験を三行以内で具体的に書きなさい。

次の文章は、筆者が「バンバンクラブ」との関わりを通じて得た気付きを述べています。「バンバンクラブ」とは、目の見えないマラソンランナーに、目の見える人がそばについて、一緒に走るクラブです。文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。(設問の都合で本文に段落の番号を付しています。)

1 コミュニケーションという観点から伴走について考えるうえでまず重要なのは、「ロープ」の存在です。目の見えないランナーと目の見える伴走者は、直接体をふれ合っているわけではありません。ロープを介して、お互いの体の動きを感じ取っています。

2 バンバンクラブの練習で長距離を走る場合には、基本的にロープを輪つかにして使います。できた輪つかの一ヵ所を目の見えないランナーが持ち、反対側を目の見える伴走者が持つ。この状態で一人が横に並んで走ります。

3 クラブに参加してみると、人によってロープに好みがあることが分かります。毛糸のような柔らかい素材を自分で三つ編みにして使っている人もいれば、靴紐を太くしたような専用の紐を使う人もいる。輪のサイズも大きいのが好きという人もいれば、拳がぶつかるほど小さくしている人もいる。持ち方も、ぎゅっと握る人もいれば、小指は外して三本の指をかけて持つ人もいる。①要するに、それだけのこだわりをかけるほど、ロープが重要だということです。

4 そんな思い思いのロープを使って、伴走が始まります。伴走の面白いところは、二人がロープを介してつながった状態で、長い時間、同じ動作を共有するということです。「行為」ではない。「動作」を共有するのです。

5 「行為の共有」であれば、目の見えない人が日常的に行っていることです。目の見えない人は、日々のガイドにおいて、目の見える人の肘や肩に手を添えて一緒に歩く、という経験をしています。しかしそれは単に同じ方向に向かつて、同じ速度で進んでいるだけであって、動作そのものを、つまり体の動きそのものをシンクロさせているわけではありません。

6 これに対して伴走においては、腕を振るリズム、足を出すタイミング、歩幅、体の向き、といった体の物理的な動きを、ブラインドランナーと伴走者がシンクロさせています。しかも、この状態が數十分から数時間というかなりの長い時間にわたって持続する。中には五〇〇キロを超えるウルトラマラソンに挑戦するブラインドランナーもいますから、そんなときには、休憩をはさんで数日にわたって、二人でリズムを共有しつづけることになります。(中略)

7 この長時間にわたる動作のシンクロは、ある種の「接続の安定」をもたらします。走るというダイナミックな条件下での接続であるにもかかわらず、リズムが共有されていることによって、かえって安定するのです。走歴七年の全盲の女性ランナー、ドラさ

んは言います。

走っているときは、二人で同じ動きをしてるんです。紐を持っていますけど、腕が触れそうな状態で同じ動きをしていますよね。日常生活では、あっち向いたりこっち向いたりしているし、こちらも、次は車に乗るんだな、とか先にある行動を予想しながら動いています。ランニングだと、予測しなくともずっと同じ動きを続けられる。

8 これは、ひとことで言えば②「現在」に集中しやすい、ということでしょう。日常生活においては、次何をするのかな、もうそろそろかな、と「先読み」しながら動くのが通例です。特に目の見えない人の場合は、予測をしていないと、相手は階段を上ったのに、それを知らされずに自分だけつまずいてしまう、なんていうことが起こりかねない。予測することで、相手の運動と自分の運動がずれてしまいうリスクを減らすことができるのです。<sup>\*</sup>

9 これに対し、伴走は、同じ「走る」がひたすら続いていきます。そこには、「歩いて、止まつて、座る」のような行為の分節はありません。すると、「次」に対する予測のスイッチを切る」とができる。「どうなるんだろう」という過剰な疑シン暗鬼は無用です。

10 もちろん、これは何も感じないと「う」とではありません。むしろ、予測が不要だからこそ、走るという行為の中で起こっていいる微細な変化について、感度を高めることができる。未来ではなく、現在に集中しやすくなっています。

11 言うまでもなく、この「現在への集中」は、(中略)「信頼」の問題と(a)ミツセツに関係しています。信じているからこそ、「どうなるんだろう」という予測スイッチを切り、「伴走者といっしょに走る」という行為に身を任せることができます。

12 (中略) 私もアイマスクをして伴走者と走る体験をしたときには、とてもない恐怖と不安で、最初は足がすくんでしまいました。伴走してくれたのは大のベテランだったのですが、一歩踏み出そうとするたびに、③足元に段差が「見え」たり、目の前に木の枝が「見え」たりするのです。もちろん、アイマスクをしているので、物理的に何かが見えているわけではないのですが、おそらく予測モードが過剰に発動していたのでしょうか、段差や木の枝が「ある」ようを感じていました。

13 でもある瞬間、実際には走り始めてほんの数分のうちに、「うした不安と恐怖は私から離れていました。そのときの感覚は、

「大丈夫だ」と確信できたというよりは、「ええい、どうにでもなれ」とあきらめて飛び込む感じに近かったように思います。まさに不確実な要素があると（レ）ジカクしながらも、ひどい目にあわないだらうと「信頼」した瞬間でした。

14あのときの信頼は、果たして何に対する信頼であったのだろう、とときどき思い返します。もちろん、伴走をしてくれたその人に対する信頼は大きかつたのですが、それだけではないように思います。一人の人間がロープでつながりながら走るということが可能だ、という□1そのものへの信頼や、それをあたりまえにやつてきたブラインドランナーがいるという□2への信頼、そして自分自身の□3能力への信頼、そういうものが混ざつて可能になった「走る」であつたよう思います。

15いつたん信頼が生まれてしまえば、そのあと「走る」の、なんと心地よかつたことか。最初はウォーキングでしたが、すぐにおのずとスピードがあがつて走り始め、最後は階段をのぼることまでできるようになりました。ずっと走つていい！それは、人を一〇〇パーセント信頼してしまつたあとの何とも言えない解放感と、味わつたことのない（ウ）フシギな幸福感に満ちた時間でした。

16と同時に痛切に感じたのは、いかにふだんの自分が人や状況を信頼していなかつたか、ということでした。怪我をする覚悟も含めて人に身を預ける、などということを、私はほとんどしたことがありませんでした。もちろん、子供のころは周囲の大人に身を預けていたはずです。けれども子供は、必ずしも不確実性を分かつたうえで信頼しているわけではありません。④信じて依存する、というのは私にとって非常に新鮮な経験でした。

17では、具体的にロープを介したやりとりについて見ていきましょう。先に指摘したとおり、多くのランナーが口にするのは、長時間にわたつて動作をシンクロさせることによつて起つる「共鳴」の感覚です。

18たとえば全盲の女性ランナー、ジャスミンさんは言います。ジャスミンさんは、フルマラソンを四時間台で走るベテランランナーです。「ロープを持つて二人で走つていると、『共鳴』するような感覚があるので、お互<sup>たが</sup>いの調子があがつてくると、はずむようなナリズム感が伝わってきて、楽しい、いいのが躍る感じがします」。

19いわば、揺れる二つの振り子のような状態でしようか。一本の糸から二つの振り子を垂らし、一方の振り子を手で押して揺らすと、次第にその搖れが伝播してもう一方の振り子も揺れ始める。伴走におけるロープは、まさにこの二つの振り子をつないでいる「横糸」のように、ふたつの体の振動を結びつけます。

20 振り子にしろ、体にしろ、共鳴のポイントは、「自由と動く」ところでしょ。押していないのに、あるいは自分が走ろうとする以上に、相手の振動を得て動きが増幅していく。自由と動くのだから、体は軽く感じられるはずです。ジャスマンさんの⑤「楽しい、いいのが躍る感じ」は、そしてベンバンクラブの人気の秘密は、この軽やかさからきていると考えられます。

21 あらためて実感するのは、ロープの力です。もし、二人のランナーがじかに手をつないで走るとしたら、どうでしょうか。おそらく、目の見える伴走者が目の見えないランナーをぐいぐい引っ張つて連れて行くような走り方になってしまふはずです。うまく走れたとしても、そこにあるのは相手の体を道具のように扱う一方的な「伝達」のコミュニケーションであつて、決して「楽しい、いいのが躍る感じ」ではないはずです。共鳴は生まれようもありません。

22 でもロープなら、「あそび」ができる。がちがちに固定されていないつながり方だからこそ、多少動きがずれたとしても、ロープがそのずれを吸収してくれます。走っている側も、ずれたことを感じ取つて調整する余裕ができます。柔らかいロープだからこそ、バッファとしての機能を持つことができるのです。実際、特に初心者の場合には、ロープを持つときにはピンと張るように持つのではないか、多少たわむようにして持つのが通例です。ロープを持つ手も、人によつてはかなり力を抜いてしまう。

23 重要なのは、このあそびがあるからこそ、ずれを通してお互いの状態を感じ取り合うことができる、ということです。つまり⑥「生成的」なコミュニケーションができる。ゆるいロープによつてつながりを間接化する」といふことで、二つの体の動きが衝突するところなく、混じり合うことができる。(中略) ここにあるのはむしろ、「自然と相手の体が入つてくる」状態というべきかも知れません。

(伊藤亜紗『手の倫理』による)

※注 伴走：目の見えないマラソンランナーに、目の見える人がそばについて走ること。  
シンクロ：同時に同じ動きをすること。

ブランドランナー：目の見えない走者。  
ダイナミックな…動きがあり力強い。  
程度を超えていること。  
痛切：心に強く感じる様子。  
させる」と。  
程度を超えていること。  
あそび：ゆとり。  
させる」と。  
リスク：危険。  
分節：区切り。  
伝播：伝わり広まる」と。  
余裕：バッファ：二つのものの間で衝突をやわらげるもの。  
自ずと…自然と。  
增幅：揺れ動く幅を増大

問一 次の各設間に答えなさい。

- (1) (a) ～(う) のカタカナを漢字に直しなさい。  
(a) ミツセツ  
(b) ジカク  
(c) フシギ

(2) 「疑シン暗鬼」の「シン」と同じ漢字を持つ四字熟語を次の①～⑤から選び、記号で答えなさい。

- ⑦ 溫故知シン ① シン出鬼没 ⑦ 一シン一退 ④ シン機一転

問二 —— ① 「要するに、それだけのこだわりをかけるほど、ロープが重要だ」ということですが、筆者はなぜロープが重要だと考えていますか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を本文から抜き出して答えなさい。  
・ランナーは、ロープを介してお互いの体の動きを（ A：五字 ）走る」とにより、相手と（ B：漢字二字 ）を共有できるようになるから。

問三 —— ② 「現在」に集中しやすい」とありますが、それはなぜですか。簡潔に書きなさい。

問四 —— ③ 「足元に段差が『見え』たり、目の前に木の枝が『見え』たりするのですが、こりやどう「見え」るとはどのようないいことですか。本文の言葉を用いて説明しなさい。

問五 本文中の 1 □ • 2 □ • 3 □ においてはまる最もふさわしい言葉を次のア～ウからそれぞれ選び、記号で答えなさい。  
ア 身体 イ 歴史 ウ 行為

問六 —— ④ 「信じて依存する」とありますが、これは具体的にどうすることを言ったものですか。それを説明した文章として、最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。  
ア 怪我をする状況を想像することなく、相手にリードされながら走ること。  
イ 怪我をしても仕方ないと開き直って、自分の体力だけを信じて走ること。  
ウ 怪我をする可能性を理解した上で、相手に対し身をゆだねて走ること。  
エ 怪我を恐れてはいけないと奮い立つて、自分の勘と経験を頼りに走ること。

問七 ——⑤『楽しげ、いいのが躍る感じ』とあります。これはどのように生まれますか。「ロープ」の語を用いて答えなさい。

問八 次に示すのは、筆者が述べている「伴走」について整理したノートです。ノート中の **A** ～ **C** にあてはまる言葉を、それぞれ字数の指示に従って本文から抜き出して答えなさい。

### 【動作】

#### 【段階】 ▽段階1 (形式段落1～6)

二人でお互いの体の動きそのものをシンクロさせる

#### ▽段階2 (形式段落7～16)

段階1の状態が持続する

- ・リズムが共有され、接続が **A** (二字) する

- ・「現在」に集中して走れるようになる

**B** (二字)

が生まれる

#### ▽段階3 (形式段落17～23)

- ・**C** (二字) の感覚を得て、軽やかに走れるようになる

○  
ロープを輪つかにして両方から持ち、走る  
目の見えるランナー

問九 ——⑥『生成的』なコミュニケーションができるについて、次の各設問に答えなさい。

- (1)『生成的』なコミュニケーションと対照的に用いられている言葉を本文から一十字以内で抜き出して答えなさい。
- (2)ロープを使って伴走すると『生成的』なコミュニケーションができるようになる理由を、筆者はどのように考えていますか。ロープの利点を踏まえ、本文の言葉を用いて百字以内で説明しなさい。